Japanese association of educational psychology

説明場面における身振り表現の使い分け

藤井美保子
（日本学術振興会・お茶の水女子大学）

問題

対面相互作用場面で具体的な事物を説明する際に行われた身振りを発達的に比較したところ、幼児は主観的視点の身振り（身振りの中に自己の身体が取り込まれる、表現対象になりきって演技する）、成人は客観的視点の身振り（対象をミニチュアのように表現する、手を表現対象にみたてて操作する）を多く行うという質的差異のあることが示された（藤井, 印刷中）。本研究では、このような身振り表現の視点の違いに影響を与える要因は何かを検討する。

発話や身振りの産出には、第一に表現内容の源となる心的表象がありそれを分節化していくという発話者の内的過程、第二に聞き手との関係の中で調整していくという外的要因による影響が考えられる。ここでは、心的表象を柔軟に操作することができる成人が、対面相互作用場面で身振りの視点を実際にどのように使い分けているのか、第二の要因の役割について検討した。具体的には、後で幼児に映像を見せるから、彼らに分かるように説明せよ、というビデオ録画条件と、後で幼児に聞かせるから･･･というテープ吹き込み条件を被験者内要因として設け、聞き手の存在によりどのように身振りの視点が使い分けられるのかを比較した。なお身振り表現には個人差が大きいことが知られているが、パーソナリティとの関連を調べるため、セルフモニタリング尺度による評定も実施した。

方法

被験者；大学生２４人。

材料；○説明課題２セット

A．ブランコ・はしご・花瓶・三角形・ねこ・きりん・あり・恐れ・あたたかい・鉛筆・くし

B．すべり台・自転車・お皿・四角形・鳥・象・毛虫・喜び・みにくい・はさみ・はぶらし

○セルフモニタリング尺度

Synder(1974)の日本語版（岩淵・田中・中里, 1982）。２５項目からなり、「外向性」「他者志向性」「演技性」の３因子が抽出されている。

手続き；大学の一室で個別に行い、ビデオ／テープ条件ともにビデオカメラで記録された。被験者はビデオ録画、テープ吹き込みと理解して説明を行った。条件の順番、説明課題はカウンターバランスをとった。その後セルフモニタリング尺度に筆記で回答した。

結果と考察

１．全般的比較

発話時間に差はない($t(23)=-.612, P>.54$)にもかかわらず、文節数($t(23)=-4.151, P<.001$)、身振り頻度($t(23)=-.7.817, P<.001$)は、ともにビデオ条件でテープ条件より多かった。相手の視線を想定した場合には身振りの使用が増えることが示された。また文節数が増加したことから身振りを伴わせることで発話が促進される可能性も示唆された。

２．主客の視点

ブランコ・すべり台課題の検討から条件間に有意な差が見られ、Figure. 1に示すように、ビデオ条件では客観的視点の身振りが多いことが示された($F(1, 23=25.783, p<.0001)$)。ビデオ条件で身振り頻度が増えていたのは、客観的視点の身振りの増加に由来していた。

つまり成人では聞き手の視線によって身振りを使い分けており、聞き手との関係で表現を調整するというsocial/communicativeな要因の影響があるということが確認された。

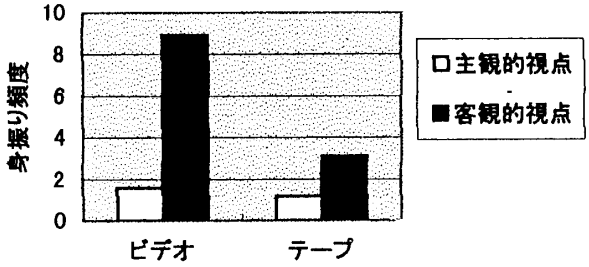

Figure. 1

３．セルフモニタリング

セルフモニタリング能力と、全般的な身振り頻度、主客の視点の使い分けは、ともに相関がみられなかった。

NII-Electronic Library Service